

上郷町埋蔵文化財発掘調査報告書 第20集

中 島 遺 跡
矢 崎 遺 跡

— 昭和61年度町道御殿山14号線・別府線
改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1989.5

長野県下伊那郡上郷町役場建設課
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

上郷町埋蔵文化財発掘調査報告書 第20集

中 島 遺 跡
矢 崎 遺 跡

— 昭和61年度町道御殿山14号線・別府線
改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1989.5

長野県下伊那郡上郷町役場建設課
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

序

町の道路新設・改良に伴い、本報告書に記録されている路線改良につきましては、埋蔵文化財包蔵地として周知されている所であり、町の教育委員会とも協議し、発掘調査が実施されました。調査に当たっては、調査団長の今村善興先生指導のもと順調に進められ、本書にまとめられたものであります。

報告内容は、昭和61年度において施工しました町道222号線（通称御殿山14号線、延長123.9m・幅員4.5mの拡幅改良）に係わる中島遺跡、町道3号線（通称別府線矢崎、延長53.4m・幅員4.5mの拡幅改良）に係わる矢崎遺跡の調査についてまとめられています。

中島遺跡につきましては昭和61年10月に、矢崎遺跡につきましては昭和62年3月に発掘調査が実施されました。その結果、中島遺跡で縄文時代中期の竪穴住居址、矢崎遺跡で縄文時代前期後半の竪穴住居址等が出土し、貴重な成果と考古学上重要な資料を得ることができました。特に、矢崎遺跡における住居址は下伊那地方ではほとんど発見されていない時期の遺構で、貴重な調査例と言われています。

ここに、本調査報告書をまとめられるまで御尽力いただきました今村調査団長をはじめ、調査団関係者各位の御努力に対して深甚なる謝意を表し序文と致します。

平成元年5月

上郷町長 山田隆士

例 言

1. 本報告書は昭和61・62年に実施された別府中島地籍町道御殿山14号線・矢崎地籍町道別府線改良工事に伴う緊急発掘調査報告書である。
2. 他の遺跡発掘調査と並行した調査であるために、現地での測量・記録は中島地籍は調査補助員林敏が、矢崎地籍は調査補助員米山が林貫の協力を得て当たっている。
3. 報告書作成に当たって中島地籍の土器拓本整理は林貫・福田が、石器実測整理は調査補助員林敏が当たり、矢崎遺跡の土器測量は吉川金利、土器拓本撮りは米山義盛・伊藤泉が当たり、遺構・遺物の整図・編集は今村が担当している。
4. 現地での写真撮影・遺物の写真撮影は今村が担当している。
5. 本書の報文の執筆・編集は今村が当たっている。
6. 両地籍の遺物は、上郷町歴史民俗資料館に保管されている。

目 次

序 例 言 目 次

I 調査の経過	1
1. 中島遺跡の調査	1
2. 矢崎遺跡（道路用地）の調査	1
3. 調査団組織	2
(1) 調査団	2
(2) 調査事務局	2
II 遺跡の立地と環境	3
1. 自然的環境	3
2. 歴史的環境（遺跡を中心にして）	5
III 調査の結果	7
1. 中島遺跡の概要	7
2. 中島遺跡の遺構と遺物	7
(1) 1号住居址	7
(2) 1号竪穴	8
(3) 2号竪穴	9
(4) その他の遺物	9
3. 矢崎遺跡（道路用地）の概要	10
4. 矢崎遺跡（道路用地）の遺構と遺物	10
(1) 1号住居址	10
(2) 土 墳 1	11
(3) 土 墳 7	12
(4) その他の土墳	13
(5) 竪穴1・2	13
(6) その他の遺物	13
IV 調査のまとめ	14
1. 中島遺跡発掘調査の意義	14
2. 矢崎遺跡（道路用地）の縄文時代前期の遺構	15

挿図・図版目次

第1図	中島・矢崎遺跡位置図	4
第2図	中島地籍遺構配置、1号住居址、1・2号竪穴	8
第3図	矢崎遺跡遺構全体図、1号住居址・土壇1	12
第4図	中島地籍1号住居址・2号竪穴出土土器	17
第5図	中島地籍グリット出土土器、1号住居址・2号竪穴出土石器	18
第6図	矢崎遺跡1号住居址出土土器(1)	19
第7図	矢崎遺跡1号住居址出土土器(2)	20
第8図	矢崎遺跡1号住居址、土壇1・4・5・7出土土器	21
第9図	矢崎遺跡グリット出土土器、1号住居址ほか出土土器	22

写真図版目次

写図1	中島地籍調査風景	23
写図2	中島地籍1号住居址、2号竪穴	24
写図3	中島地籍2号竪穴(南から)	25
写図4	矢崎地籍調査地(1)	26
写図5	矢崎地籍調査地(2)	27
写図6	矢崎地籍1号住居址	28
写図7	矢崎地籍土壇1	29
写図8	矢崎地籍1号住居址出土土器(1)	30
写図9	矢崎地籍1号住居址出土土器(2)	31
写図10	矢崎地籍1号住居址出土土器(3)	32
後記		55
付編	矢崎・北浦遺跡出土鉄滓の金属学的分析調査結果報告	33

I 調査の経過

1. 中島遺跡の調査

昭和61年10月南条棚田遺跡調査中に別府中島地籍で町道御殿山14号線改良工事が進行しているとの連絡があり、上郷町教育委員会の依頼により一部の作業員により緊急調査をすることになった。10月20日作業を開始したが道路予定地は既に掘削が進み何か所かに黒色土の落ち込みが見られていた。町道別府線との分岐点を0として南側へ向かってグリットを設定し、上面を削るような調査に入った。基点から南20mほどの所に東側用地外に半分掛かる円形の堅穴が発見され、その西側に小判形の堅穴が発見された。10月21日から24日にかけて作業員3人による検出作業を進める。落ち込みはあるが礫の多い砂質土中の住居址のようで、遺物の出土はあるが床面ははつきりせず焼土も少なく検出手間取った。10月25日から堅穴2の掘り下げに掛かったが、中層に石が多く70cmの深さがあり28日まで掛かっている。1号住居址の南側に黒色土の落ち込みがあるので10月29日に検出して大忙しの調査を終了している。

2. 矢崎遺跡（道路用地）の調査

昭和61年3月9日上黒田日影林遺跡調査中に別府矢崎地籍で町道別府線矢崎地籍の改良工事が計画されるために、上郷町教育委員会吉川係長と今村が現地調査をした。予定地は矢崎地籍の上方台地の先端部に位置し、遺物の表採もなされ遺構の埋蔵も予想されるので事前調査の必要を感じた。改良工事はすぐ下段まで進行し緊急を要すること、改良工事は拡幅で調査予定地も両側それぞれ1m前後であるから、調査中の日影林遺跡から別働隊を送って数日で緊急調査することにした。

3月16日重機を依頼して北東側の表土排除と石垣の除去をする。範囲はごく狭いが北西農免道路分岐点を0として北東へ調査区画を設定して、両側それぞれ5mごとに東・西1～9の呼び名をつけた。東側1で石組遺構（土壇1）・3から南で縄文時代前期の住居址・堅穴や土壇の存在が確認された。3月17日には重機による東側の石垣除去作業を続け、土壇1～5・堅穴1・2の検出作業をする。3月18日から1号住居址等の検出作業をして20日に測量を済ませ5日間の慌ただしい調査を終了している。

中島・矢崎遺跡ともに今村は他の発掘調査の合間を縫っての掛け持ちの調査であったので、検出・記録作成にいろいろ不備があった。その後、上郷町内の発掘調査・他町村の発掘調査があったので、平成元年3月報告書のまとめをしている。



矢崎地籍重機による石垣除去作業

3. 調査団組織

(1) 調査団

調査団長	今村 善興 (長野県文化財保護指導委員)			
調査補助員	林 敏	林 貢	米山 義盛	伊藤 泉
作業協力員	吉川 佐一	原 祐三	今村 春一	向田 一雄
	福田 千八	小林 薫	柳原 種樹	今村 俱栄

(2) 調査事務局

吉川 昭文 (教育委員会教育長)	北原 義信 (建設課課長 ~62. 3)
篠田 公平 (同上 事務局長 ~62. 3)	篠田 公平 (同上 62. 4~)
菅沼 富雄 (同上 62. 4~)	中 良文 (建設課工務係)
吉川 勝一 (同上 局長補佐)	今村 美和 (教育委員会社会教育係)
山下 誠一 (同上 社会教育係 62. 4~)	

II 遺跡の立地と環境

1. 自然的環境

中島・矢崎遺跡の所在する長野県下伊那郡上郷町は、長野県の南端を南側と北側に走行する南・中央両アルプス山脈の谷間に広がる飯田盆地のほぼ中央に位置する。野底山・鷹巣山が北西にあり、そこを源とする野底川・土曾川が南流し飯田松川・天龍川に注いでいる。この両河川に挟まれて、東西に細長く続く面積26km²に及ぶ広大な緩傾斜地形の地域である。

北は土曾川によって飯田市座光寺・野底川上流地域では高森町・飯田市松川入に境している。西・南は鷹巣山・風越山から野底川下流・松川によって旧飯田市・旧鼎・旧松尾地籍に接している。この地域は南流する天龍川と、その諸支流によって形成されたいくつもの河岸段丘や広大な扇状地の広がるところであって、特に上郷町の段丘・扇状地は広いので、原始・古代から現代までの優れた生活舞台が展開している。

『下伊那の地質解説』によれば、伊那盆地全域に形成されている伊那谷の段丘は火山灰土の堆積を基準にして高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・Ⅱに大きく編年されている。上郷町にある段丘面は、中央に広がる下黒田・飯沼境の大段丘を境にして上段と呼ばれる洪積土壌の堆積する中位段丘・低位段丘Ⅰと、下段と呼ばれる沖積土壌の堆積する低位段丘Ⅱが何段かに構成されている。

低位段丘Ⅱに当たる段丘面は飯沼面・別府面・南条面と呼ばれ、飯田市松尾地籍とともに下伊那地方の段丘模式地ともなっている。上段伊久間面（黒田面）の大きな段丘崖はやく50mの比高があり、標高420～430mほどの飯沼面、その下方に410～420mほどの別府面、さらに下方に400～410mほどの南条面が帯状に続いている。南条面は天龍川現川床面との比高差5m程の低位地から、国道153号線に近いところ（標高415m）まで流入するところがあって、土壌堆積の複雑さを物語っている。飯田松川の左岸に東西に細長く続く別府地籍は別府上・別府下に別れているが、別府下も地形的に見ると最下位段丘の南条面に位置する矢崎・兼田・下河原・城東、別府面に位置する矢崎上段、飯沼面に位置する歳の神・中島地籍と低位段丘Ⅰの大段丘崖下に位置する段丘面がそれぞれの比高をもって続いている。

今回の調査地の中島地籍は飯沼面の上方に位置し、北に御殿山・高松原の大きな段丘崖を背負い、南は松川氾濫原の城東地区に面する段丘上にある。この段丘面は順次高さを低めながら東へ続き、その先端部に矢崎地籍の道路改良地が位置している。



1. 中島遺跡 2. 矢崎調査地 3. 矢崎下河原地籍 4. 兼田遺跡 5. 渡場遺跡
 6. 宮垣外遺跡 7. 化石遺跡 8. ドトメキ遺跡 ○印 周辺主要遺跡

第1圖 中島・矢崎遺跡位置圖

2. 歴史的環境（遺跡を中心にして）

上郷町の遺跡は、昭和57年度の詳細分布調査によると、埋蔵文化財包蔵地67・古墳32・中世城跡3の合計104遺跡が確認され登録されている。昭和59年頃から各地の発掘調査が進み、新発見の遺跡もあったり、古社寺跡等も含めれば更にこの数は上回る。

上郷町の遺跡を中心にした歴史の変遷過程を概観してみると、12000年以前の旧石器時代の遺構・遺物は現在のところ見付かっていない。上郷町最古のものは、上段の姫宮遺跡出土の表裏縄文式土器片・柏原A遺跡の石器剥片・栗屋元遺跡の有舌ポイントにより、縄文時代草創期の黎明を知ることができる。次の縄文時代早期になると比較的山寄りの八王寺遺跡など5遺跡から、押型土器や繊維を含む条痕文及び捻糸土器が出土している。平成元年1月の町道改良工事に伴う西浦遺跡の発掘調査でこの時期の竪穴式住居址が検出され注目されている。約6000年前の縄文時代前期の遺跡は姫宮・日影林・大明神原など8遺跡があり、今までは上段の中段段丘・低位段丘Ⅰ地帯に限られていたが、本報告の昭和61年矢崎地籍の町道改修に伴う発掘調査で前期後半の住居址が検出され、下位段丘面での生活地も検証されている。

次の縄文時代中期になると爆発的に遺跡数も増加して、低位段丘南条面下段を除き、町内全域に遺構・遺物の発見が目立っている。中期の遺跡49か所中、日影林・八幡原・栗屋元・大明神原・増田遺跡等は集落址・遺物多量発見地域として注目されている。この後に続くやく3000～4000年前の縄文時代後期には遺跡数は減少し、上段を中心に8遺跡に留まっている。昭和61年発掘調査の日影林遺跡のように住居址・土壌群が検出されるように、今後の発掘調査に期待される時期でもある。今回の中島地籍からも同時期の竪穴が検出されている。最終末の縄文時代晩期の遺跡は3か所知られていたが、昭和62年の矢崎下河原地区整備事業に伴う発掘調査で、東海系の条痕土器・東北系の浮線網状土器片が多量に発見されて注目されている。

次の弥生時代は水稲栽培が生活基盤となる新しい文化で、下伊那地方へは三河・尾張・美濃方面から伝播されたものと推定される。弥生時代前期の遺物は極少ないが、中期になると遺跡数は増大する。下段の低湿地周辺に集落の形成が推定されていたが、確証を得るまでには至っていなかった。昭和60・61年、南条下田圃地区基盤整備事業に伴う発掘調査で県下最初の弥生時代中期・後期の水田址が検証され脚光を浴びている。飯沼丹保では住宅造成に伴う発掘調査で住居址が2軒検出され、上郷町でもこの時期の遺構発見が続いている。この時期の遺跡の大半は下段の飯沼・南条・別府地籍に集中することから、低位段丘Ⅱ地帯にみられる低湿地帯を利用する水田耕作の展開が類推されている。やく1800年前の弥生時代後期になると、その遺跡は山麓地帯から天龍川川氾濫原に至る広範囲に44か所以上あり、高燥段丘上でも畑作・稲作が行なわれたものと思われる。その代表的なものは住居址43軒を検出した高松原遺跡であり、方形周溝墓11基と住居址23軒を検出した黒田垣外遺跡・大量の土器群の充滿した住居址を含め、集落の一部を検出した

矢崎地区兼田遺跡・住居址5軒と祭祀的な土器群をもつ土壇列の検出を見た飯沼丹保遺跡等である。

古墳時代の遺跡は集落址と墓域とに区別される。上郷町の古墳は煙燻古墳を含めて32基、その大部分は別府地籍の松川に面する台地端に立地し、一部が飯沼段丘崖下にある。いずれも後期古墳で、天神塚・番神塚両前方後円墳以外は円墳である。この頃の集落は古墳の近在にみられ、現在のところ上段では明確なものがなく、下段の経済的基盤の豊かな地域で発見されている。遺跡数が多い割に集落址の発見例が少なく、古墳時代前期・後期の土師器を多量出土した南条の藪越遺跡、飯沼北の的場遺跡、別府の兼田遺跡に留まっている。遺物多量出土地籍は飯沼・南条・別府各地籍に多いので今後は発見例が続くものと思われる。

奈良・平安時代の遺物は町内全域で収拾できる。奈良時代・平安時代の選別は容易ではないが、平安時代の遺構・遺物は野底山山中から下段の天龍川氾濫原際の最下位段丘まで存在が予想される。生産域の水田地まで含めれば濃淡の差はあるが町内全域に広がっている。下段地帯の松川左岸、栗沢川・土曾川右岸に所在する中島・化石、高屋、丹保・堂垣外遺跡等では多量の須恵器片が発見される。昭和62年に発掘調査した矢崎遺跡（下河原地区）は100軒以上と推測される平安時代の大集落地で、大規模な鍛冶遺構が検出され、フイブ羽口や鉄滓等の多量出土により上郷町の重要遺跡のひとつとなっている。近年実施された隣接地飯田市座光寺の詳細分布調査により、土曾川左岸地域では川に接する低地から、最低位段丘先端まで全域にわたって奈良・平安時代の遺物が採集されているが、この例は上郷町でも同様である。

この低位段丘Ⅱ地帯は、伊那郡家所在が有力視される飯田市座光寺の恒川遺跡群と同一段丘上にあって、遺物出土状況は大差なく濃密なところである。しかも古代条里制遺構の存在が地割や地名からも推測され、豊かな湧水・地下水に恵まれ生産域と居住域とが交互に立地する地帯で、古代史探究上きわめて貴重な地域のひとつである。標高410～415m辺りは小段丘先端部が南北に連なるところがあり、別府下地籍の何処かに松川渡河地点があると推定され、奈良時代に都と国府を結ぶ官道東山道の有力な通過候補地のひとつとして注目されている。

この地方は『倭名抄』・『伊呂波字類抄』等に所載される、古代伊那郡五郷のひとつである麻績郷に所属し、平安時代末期には近衛家領の郡戸庄の中にある。善光寺縁起（金沢文庫本）による伝承の宇沼村を彷彿させる低湿地の多いところが近くにあり、「下伊那史」によるとこの別府は信濃国衛の別符による荘園から起こった地名といわれ、この別府地籍には平安時代に国衛から特別の国符を得た勅免荘なるの荘園が有ったといわれている。上郷町内古墳32基中26基が別府地籍に集中している。松川・野底川左岸側の台地端に古墳列・古墳群を形成し、松川対岸の飯田市松尾地籍西部高地古墳列・上溝古墳群に相対していることは、前記の歴史的な環境とともに別府地籍の特長の一つになっている。

当初は古墳時代・奈良平安時代の遺物出土が予想されたが、調査地中島・矢崎地籍ではこの時期の遺物はわずかで双方ともに縄文時代の遺物・遺構の検出に留まったのもその場所場所により遺跡の立地の違いを物語っている。

Ⅲ 調査の結果

1. 中島遺跡の概要

別府中島遺跡は松川左岸の台地端に東西に細長く続く遺跡で、9基の古墳(中島2~10号古墳)を含む縄文・弥生・古墳・奈良平安時代、中世の遺物出土地として知られていたが、今迄発掘調査例はなかった。今回の調査地は範囲は狭いが、中島2~4号古墳(2156番地)と中島5号古墳(2059番地)に挟まれたところで古墳時代の遺物出土が予想されたが、検出された遺構・遺物は縄文時代中期・後期が大部分でわずかに中世の遺物が出土している。

(1) 主な遺構

縄文時代中期住居址 1、縄文時代中期竪穴遺構 1、縄文時代後期竪穴 1。

(2) 主な遺物

縄文時代中期土器片 多、縄文時代後期土器片 多、弥生時代後期土器片 8、古墳時代須恵器片 4、平安時代灰軸陶器片 3、中世陶器片 5。

2. 中島遺跡の遺構と遺物

(1) 1号住居址

① 遺構(第2図、写図2)

町道別府分岐点から20mほど南にあり道路予定地外に一部かかる径4.3mの円形状竪穴式住居址である。炉は発見されないがわずかに焼土があり、ピットも一応整っていることから住居址としたものである。床面もはっきりしないが礫・砂礫土と覆土の黒色土によって区別した。壁の高さは20cmほどで傾斜をもつ壁である。北東側のピットは検出されないが西南に6個検出されP₁が70cmと特別深いほかは20~30cmあり、上面が削り取られていることからみれば相当の深さがあったものと思われる。炉の位置は不詳であるが中央と西南側にわずかに焼土があった。

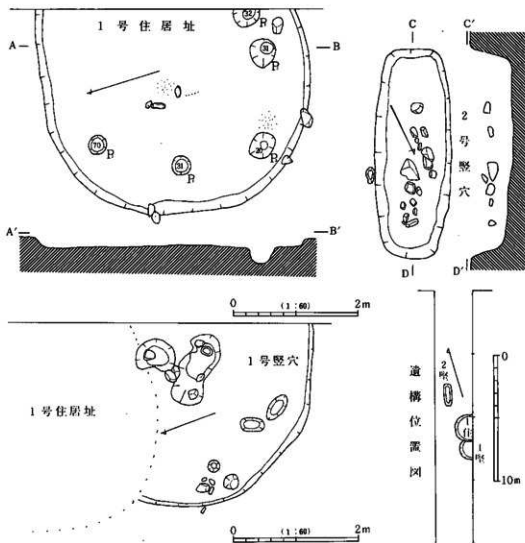
② 遺物(第3・4図)

出土した土器は破片ばかりである。第3図1~15のもので1~6は粘土紐の張り付け成形の土器片、7~15は描き目を主体とした縄文時代中期後葉の土器である。土器の出土が少なかったわ

りに石器の出土は多い。第4図14~24で21は定角形磨製石器は部分磨製のものである。

(2) 1号堅穴 (第2図、写図2)

1号住居址の南側に一部破壊されているが1号住居址に重なるように住居址状の落ち込みがあった。形態は堅穴式住居址のようではあるが出土遺物は縄文時代中期の土器片がわずかでピットも不整形であるので堅穴と扱った。堅穴の大きさは推定5mほどで掘り込みは10cmと浅い。ピットも3個あって29cmほどで住居址の名残りかと思われる。周辺には縄文時代中期の土器片や石器はあったが、堅穴内の遺物は少なかった。



第2図 中島地蔵遺構配置、1号住居址、1・2号堅穴

(3) 2号整穴

① 遺構 (第2図、写図2・3)

1号住居址の西側にあった大形な土坑状の遺構である。小判形をした細長い掘り込みで長径3.3m・短径最大幅1.25m・深さ70cmで、長軸方向はNS16°Wである。壁の掘り込みは直に近く整った堅穴である。覆土は黒色砂質土で底まで土質の変化はなかった。中層に最大30cmから人頭大・拳大等様々な石が15~16個同レベルに配され、その周辺・下層から底近くまで縄文時代中期・後期の土器片が出土している。堅穴の東側壁添いに黒色砂質土の入ったピットが2個あった。この堅穴に付属するものかどうかは不詳である。

② 遺物 (第3・4図)

器形の分かる土器は出土していないが土器片の出土は多い。第3図16~36がそれで沈線による区画のなかに摩り消しの縄文を配したもの・沈線だけのもの・摩り消しの縄文だけのもの等があるが、口縁の形態・文様構成・胎土からみて縄文時代後期掘之内式系の土器片と思われる。昭和62年に発掘調査された上黒田地籍日影林遺跡で大量検出された縄文時代後期の土器と非常に類似している。石器は2個だけであるが粗雑な造りの打製石器の破片である。黒曜石剥片も10数点出土している。

(4) その他の遺物 (第4図)

第4図1~14の土器片はグリットから出土したものである。縄文時代中期中葉・後葉の土器片は南側台地先端に近いところから発見されている。10~12は弥生時代後期の土器片で北側の町道分岐点に近い辺りで出土している。14・15は須恵器片でこのほかにも土師器・須恵器の小破片が発見されているが、南側台地先端に多かった。調査のおりには南側の台地先端部は土工工事が進行していて手が付けられない状態であったことが惜まれる。東側の畑地一帯から土師器・須恵器片が表採されることからこの時期の遺構が何処かにあったかもしれない。近くの原さんの話によると、原さん宅の裏では以前に土器が相当量出土したこと・宅地の池の工事中に土器が出土した等のことから、その土器の時代は分かりかねるが形態等から古墳時代ではなからうかと推量される。中世・近世の陶器片が町道分岐点近くで発見された。

3. 矢崎遺跡（道路用地）の概要

別府矢崎遺跡は国道153号線の下方面老神社下から農免道路の横切る台地先端までと松川左岸に面する傾斜面を含めた東西に広がる遺跡で、久保・鳥屋場古墳を含む縄文・弥生・古墳・奈良平安時代、中世の遺物多土地と知られていたが、今回の台地先端部と松川左岸添いの下河原地籍の発掘調査が行なわれるまでは発掘調査例はなかった。今回の矢崎台地の先端部に当たる地籍は道路拡幅工事のため調査範囲は狭いが遺跡実態の一部を探る調査でもあった。

当初は古墳時代・弥生時代の遺構・遺物の発見を予想して調査に入ったが、予想に反して縄文時代前期の遺構・遺物が多く須恵器・中世陶器片が少量出土しただけで、古墳時代・弥生時代の遺物発見は皆無であった。

(1) 主な遺構

縄文時代前期住居址 1、縄文時代前期土壇 2、時期不詳竪穴状遺構 2、
時期不詳土壇 7、時期不詳溝状遺構 1。

(2) 主な遺物

縄文時代前期壘形土器半完形 1、同 鉢形土器口縁 2、同 土器片 多、縄文時代中期土器片 10、平安時代須恵器片 3、近世陶器片 10、縄文時代石器 15。

4. 矢崎遺跡（道路用地）の遺構と遺物

(1) 1号住居址

① 遺構（第6図、写図6）

農免道路交差点から南東13mほどの位置で検出された遺構で南側は既設道路で削り取られ、北側は半分以上用地外で不詳のことが多く、しかも中央部に竪穴状の落ち込みがあって住居址と規定する条件が不足はしているが、ピットのあり方・僅かな焼土の所在・遺物の出方により住居址と扱った。

住居址の大きさはやく3.2mと推定され竪穴の掘り込みは西北で35cm・東南で15cm、西側は傾斜がきつく東側は緩やかである。東側には傾斜面に深さ30~37cmのピットが3個（P_{1.1.4}）並び、その周辺から壘形土器一全体（第6図5・8）が出土している。竪穴内の中央部に長さ2.3m・深さ30cmほどの落ち込みがある。南側壁傾斜面に2個のピット（P_{1.1.4}）があり、遺物出土が多かった。上下の竪穴とも床は軟弱で黒色土の覆土と黄褐色土の砂礫土の差異・遺物出土状況で判

別した。焼土はP₁層にわずかに検出された。掘り込みの状態・ピットのありかた・遺物の出土状況から全体を竪穴式住居址と扱ったが、外側の竪穴でも3m程度で小さく内側の掘り込みを同一住居とするかどうか検証の材料はないが遺物の差異・大きさから後の土壌と見たほうが良いかとも思う。なおP₁は旧電柱の穴かと思われる。

② 遺物 (第6・7・8図、写図8・9・10)

遺物の出土は多い。第6図1・2は口縁が稜をなし内側に湾曲する鉢形土器の口縁で、頸部に穴をもつ朱彩土器である。3・4も朱彩で4は竹管による同心円・斜縄文が施される底部で底辺が突出している。3に類似のものであろう。5は東側出土の羽状縄文の深鉢形土器胴部である。9から42の土器片は住居址外側(上層)東側出土のもので羽状縄文・同走行の縄文帯・浮線文・竹管文・無文の土器片で、口縁は直立丸形・キャリバー状内湾・内側突出等がみられる。第7図は上面竪穴の床面周辺出土の土器で2~27は羽状縄文・縄文・無文系のもので、28~74は竹管文系・竹管文と縄文の組み合わせ・押圧痕のあるもの・半割竹管による集合条線の付くもの等である。40・41は薄手無文の鉢形土器で口縁内湾口唇部にくぼみを付け刻みの付いたものである。

第8図1~50は内側竪穴から出土した土器で、羽状縄文は見当たらず同方向の縄文帯、太めの竹管文、粘土による円文・列点文のはり付け、口唇部刻文等がみられる。絶体的にみれば縄文時代前期後葉の土器であるが、内側の土器がやや時代が下がるように思われる。

石器の出土は少ないが、第9図52図の剥離面の多い完形石器のほかは粗雑な剥片石器・磨石状の丸石・単純な横刃型石器である。黒曜石は30片ほど出土しているが、53のスクレーパーを除いては剥片である。

(2) 土壌1

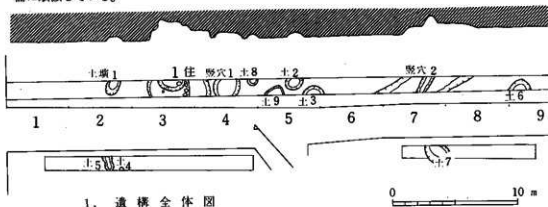
① 遺構 (第5図、写図7)

1号住居址の西南にあった集石をもつ土壌である。東側が用地外に掛かっているため全体の大きさは不詳であるが、長径は推定1.5m・短径やく1mで検出面からは深さ30cmほどの大きな土壌である。土壌の西側に偏って15~20cm大の石・拳大の石が数十個並べられ、石間には相当量の炭が検出されている。集石の位置は土壌の南西に片寄り、半分は土壌の南壁に付くもの・土壌の中層にあるものもある。土壌の北側には殆ど石がみられない。石間や石の下から土器片が出土しているが北側に多くあった。

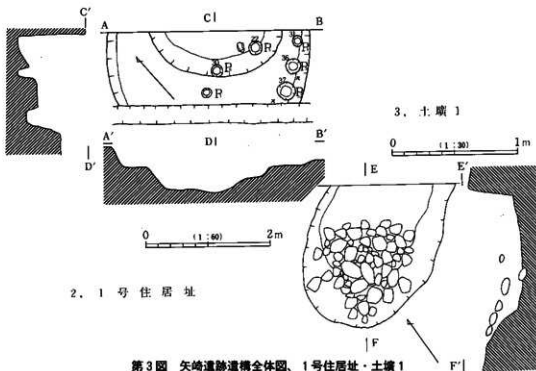
② 遺物 (第8図)

第8図51~57で同方向の縄文・細かめの縄文・無文の土器片であるが縄文時代前期後葉の土器である。数が少ないからはっきりしたことは言えないが、1号住居址の内側竪穴から出土した土

器に類似している。



1. 遺構全体図



2. 1号住居址

第3図 矢崎遺跡遺構全体図、1号住居址・土壇1

(3) 土壇7 (第5図)

遺構と遺物 既設道路の西南側7の地籍で検出された土壇である。石垣の上で用地幅の狭いところで一部落ち込みを見つけ、無理して掘り下げたものである。50cmほどの掘り込みがあり10片くらいの縄文時代前期の土器片が検出されている。土壇と扱ってはいるものの西側の落ち込みははっきりしているが東側は画然としないので、住居址の可能性もある。柿の木があるために拡張

は難しく遺物の確認だけに終わっている。

遺物は第8図64～68で太めの縄文帯・円文のはり付け・連続爪形文・竹管文等がみられる。遺物の量は少なかったが縄文時代前期の遺構であることは間違いないだろう。

(4) その他の土壌 (第5図)

遺構全体図にあるように北東側に土壌8・9・2・3・6が検出されているが、円形・楕円形・方形いろいろある。土壌の大きさは8が70cm、9が2.1m、2は1.3m、3は1.6m、6は1.6mほどで、深さも30～40cmあるがどの土壌からも遺物の発見はなかった。西南側2に浅めの土壌4・5が検出された。周囲からは遺物が発見されないが4から8図61、5から62・63の土器片が出土している。

(5) 竪穴1・2 (第5図)

1号住居址の東南に径2mほどの円形状の竪穴があった。深さは30cmほどあって壁の掘り込みは直に近く床面も平坦な整った竪穴である。遺物は上面で近世陶器が検出されてはいるがこの竪穴に結び付くかどうか不詳である。

東側7の地点で3.5m～4mの竪穴状遺構があった。西は道路で切れ東は用地外であるために細長く続くものか方形になるものか不詳であるが、底は平面的で床状のところもあり摺鉢片・陶器片が出土しているので、中世末か近世の竪穴ではないかと思われる。中央に竪穴遺構の方向とは違って溝状遺構があった。

(6) その他の遺物 (第9図)

第5図に示した既設道路内の1～9までの数字は西南側農免道路の分岐点から5mごとの地区割したものである。第9図の1～41の土器は上記地区ごと遺構外から出土した主なものを記載したもので、土器の左肩の数字は地区を示している。西側では殆ど出土していないので東側の地区になる。1～9は殆ど縄文時代前期のもの、10・11も同様、12～16も殆ど縄文時代前期のものである。17～20は縄文時代であるが、21は須恵器片である。22～26、28～30、32～35も殆ど縄文時代前期のもので中期と思われるものが見当たらない。27・31・36は須恵器片で平安時代のものである。4～9地区にかけて量は多くないが平安時代・中近世のものがあるほかは縄文時代前期のものである。37は竪穴2出土の瀬戸灰釉陶器、38は9地区の摺鉢片である。39～41は南西側用地外で表採した中世末～近世の陶器片である。

石器は49・50の打石器は4地区、54の石鏃は5地区から出土している。

IV 調査のまとめ

1. 中島遺跡発掘調査の意義

別府地籍国道153号線上方には松川と野底川左岸に面する台地端に東西に細長く続く中島・ドドメキ遺跡が広がり、中島遺跡の北側御殿山段丘崖下に化石遺跡がある。それぞれに古墳所在地が含まれドドメキ遺跡には6基・中島遺跡には9基・化石遺跡には3基あって、合わせて18基の古墳列・古墳群を形成している地域である。表探調査による遺物は多いところで縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良平安時代・中世の有力な包蔵地と推定されている。ところが今まで発掘調査された地籍が何もないところでもある。

今回僅かな範囲ではあったが町道御殿山14線改良工事に伴う発掘調査が実施されたことに意義がある。昭和61年のことであったので現在のようない教育委員会と建設課の事前連絡が不足している状況のなかで、極めて緊急な発掘調査ではあったがほんの一部に過ぎない調査であっても事前の発掘調査が計画されたことにも大きな意義がある。経過でも触れたように南条棚田遺跡の発掘調査中であり、貧弱な調査体制のなかから掛け持ちの調査は十分な検出調査・記録が出来なかったが、全く未調査のまま工事が進行することを思えば多少の効能はあったと思っている。このような調査をよしとは決して思えないが現在の事前協議の方向付け・調査体制の確立のための試金石の一つになったと慰めている。整理・報告書のまとめをしてみよう調査の不備の多かったことに対して申し訳なさに心を痛めている。

中島地籍の道路改良予定地は中島2・3・4号古墳の中間に位置するところの場合によっては古墳の周溝が検出されるかもしれない、古墳群のある地籍は墓域として設定されたであろうから、古墳時代以降の集落は少ないと推量されるが実情はどうかそんな期待をもって調査に入ったが、周溝の発見はなく古墳時代の遺構・遺物の発見はなかった。僅かな調査範囲から結論付けることは早計であるので今後の調査の目安の一つになれば幸いと思う。

予期に反して縄文時代中期の竪穴状住居址が発見され、縄文時代後期の土器を多く出土した土壇状の竪穴が検出されたことは大きな収穫であった。今にして思うと上黒田日影林遺跡で縄文時代後期の大量な遺物が発見され住居址・土壇が検出されたり、別府矢崎の下河原地籍で縄文時代晩期の土器が多量に発見されているが、当時としては貴重な発見の一つであった。後項でも触れるが下位段丘先端部における縄文時代の遺構・遺物のあり方に一つの示唆が与えられた調査の結果であった。

2. 矢崎遺跡（道路用地）の縄文時代前期の遺構

矢崎地籍は松川左岸に位置する松川氾濫原とその北に接する台地である。台地は大きく分けると2段に構成され上位段丘に矢崎遺跡、下位段丘に兼田・波場遺跡がある。矢崎遺跡は上位の台地上と松川氾濫原に面する自然堤防上に位置し、北東面に立地する久保・鳥屋場古墳を含めて縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良平安時代・中世の濃密遺跡と推定されている。昭和62年度の土地改良事業に伴う発掘調査によって、矢崎遺跡下河原地籍では縄文時代晩期の土器集中・平安時代の大鍛冶遺構や大集落の存在が検証され、兼田遺跡では弥生時代の集落・古墳時代の住居址等が検出されこの地区の重要遺構の一部が現われ始めている。

今回報告の矢崎遺跡町道別府線用地内の発掘調査は矢崎地籍では初めての調査であったが、中島地籍と同様事前の保護協議がないまま工事が進行して極めて緊急な発掘調査であった。上黒田日影林遺跡と掛け持ちの調査であったことは中島地籍と同様で、詳細な現地調査・記録の保存等にも多くの不備があったことには変わりがない。

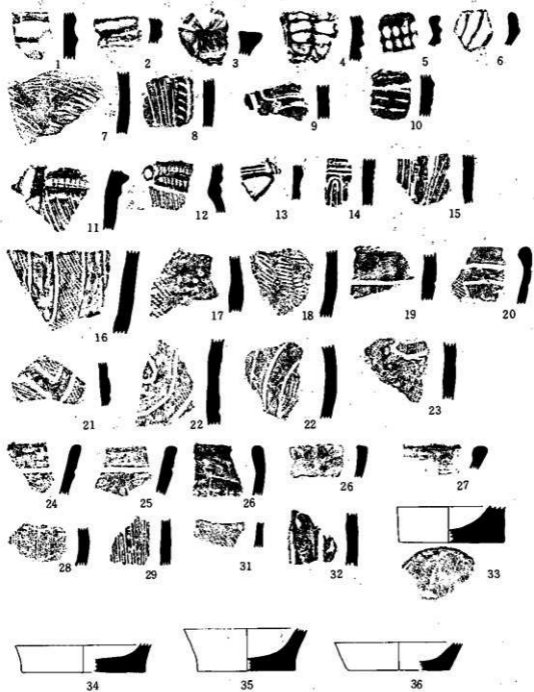
上位に位置する矢崎台地の先端部に当たるために弥生時代・古墳時代・平安時代の遺構・遺物の発見があるものと予想したが、調査の結果は予想に反して弥生時代・古墳時代の遺物発見は皆無で、平安時代の遺物も極めて僅かであった。そのかわりに全く予期しなかった縄文時代前期の土器が多く、住居址かと思われる遺構・遺物包含の多い土壌が検出され遺跡立地の考察に大きな課題が提供されている。

縄文時代前期の遺構発見地は下伊那地方でも数は少なく10指に足りないのが現状で、上郷町でも遺物表採地区まで含めても8遺跡程度である。どちらかといえば中位・高位段丘面に多いと推定されていたが、低位段丘の先端部にこの時期の遺構が発見されたところに大きな意義がある。しかも1基のみならず複数の遺構が検出され遺物出土範囲が比較的広いことに注意が必要である。そのことからみるとごく限られた範囲の調査であったこと・極めて短期間の慌ただしい調査であったことが惜しまれるが、今後大きな課題提供ができたことがせめてもの幸いかと思われる。縄文時代前期後葉の遺物・遺構であったが、この時期のものは下伊那各地で発見されていて今後類似の事例が増加するに違いない。

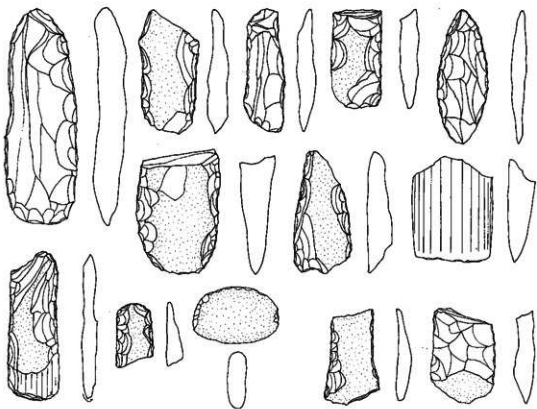
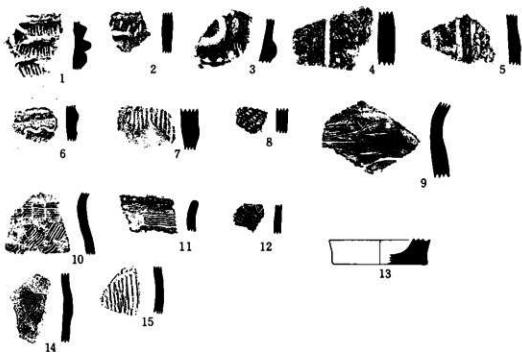
発掘調査例の少ない現在では事例考察は困難ではあるが、飯田・下伊那地方では低位段丘台地先端部で縄文時代前期の多くの土器が発見されているところが数カ所ある。泰阜村宮平・飯田市川路今洞遺跡・喬木村小川馬場平・同村阿島郭遺跡・豊丘村河野三島遺跡等であり、やや高いが低位段丘Iに当たる高松原遺跡も類似している。それぞれが地域の違いにより立地条件の相違があるけれども台地端またはそれに近い位置にあるもので、比較的低位にも縄文時代前期の集落、あるいはそれに関連する遺構の存在を暗示しているように思える。

縄文時代前期・早期の集落のあり方については未解明な問題が多々あるなかで、他地区のこと

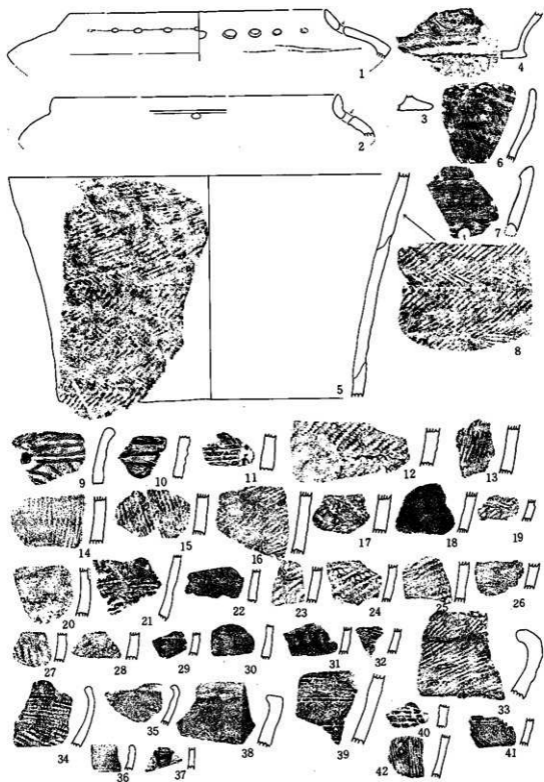
ではあるが諏訪郡原村阿久遺跡のように相当組織的な集落（住居址・墓域・共同生活地）を形成する例もあるので、下伊那にもそれに類する遺跡が無いとは言いきれない。その意味からも矢崎地籍の調査結果が役立つときもあるかもしれない。



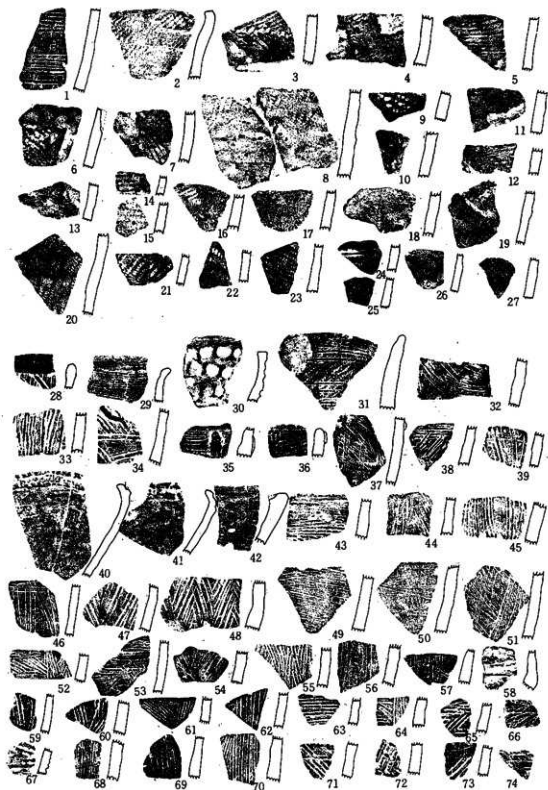
第4图 中島地籍 1号住居址・2号整穴出土土器(1:3)



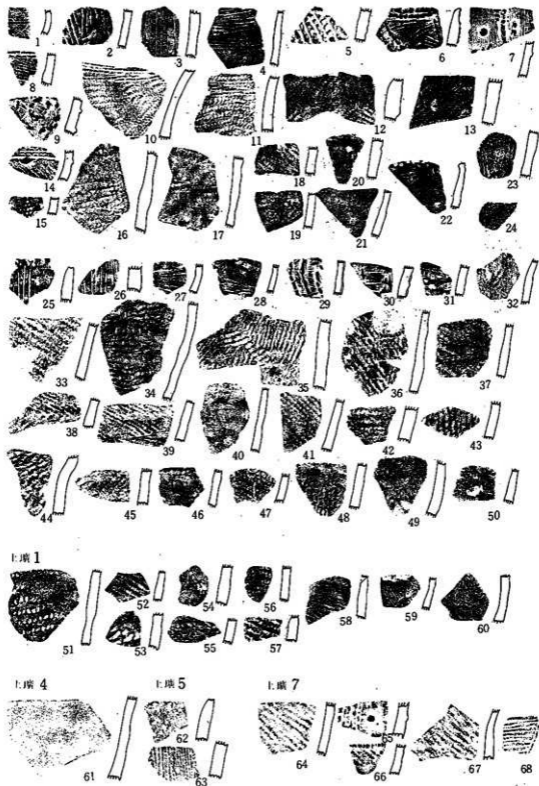
第5図 中島地籍グリット出土石器、1号住居址・2号竪穴出土石器(1:3)



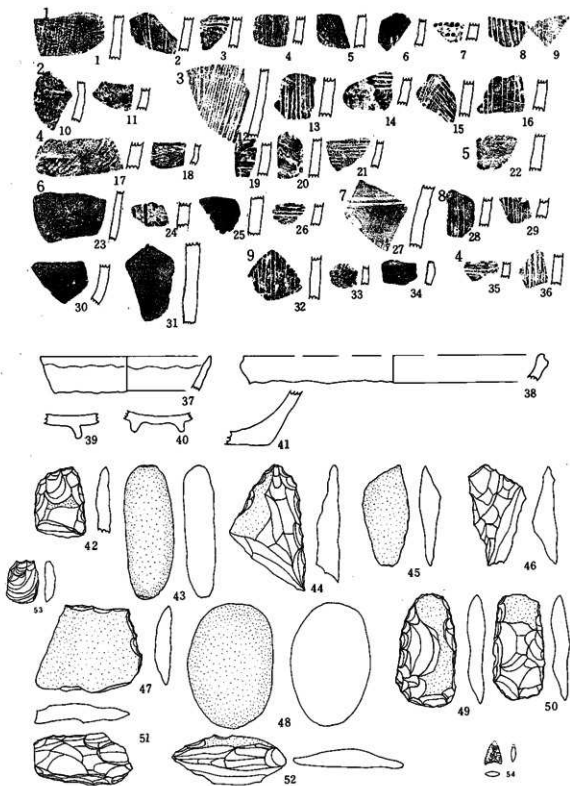
第6图 矢崎遺跡 1号住居址出土土器(1) (1 : 3)



第7圖 矢崎遺跡 1号住居址出土土器(2) (1:3)



第8图 矢崎道跡1号住居址、土坑1・4・5・7出土土器（1：3）



第9図 矢崎遺跡グリット出土石器、1号住居址ほか出土石器(1:3)

写图 1 中島地籍調査風景



写図2 中島地籍1号住居址、2号整穴

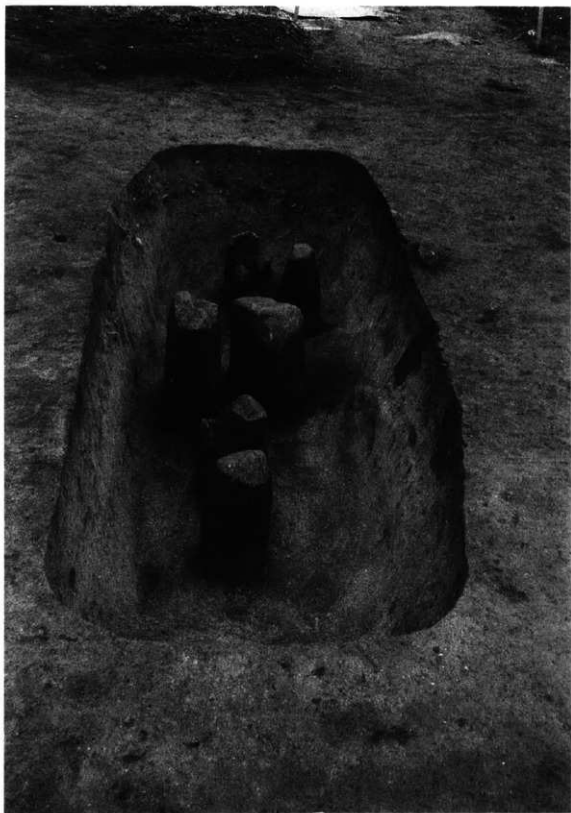


1. 1号住居址 (西から)



2. 2号整穴、1号住居址・1号整穴

写図3 中島地籍2号竪穴（南から）



写図4 矢崎地籍調査地(1)



1. 調査前 (手前農免道路)



2. 調査中 (南から)

写図5 矢崎地籍調査地(2)



1. 北東側



2. 東側

写図6 矢崎地籍1号住居址



1. 手前が道路



2. 内側壁穴部

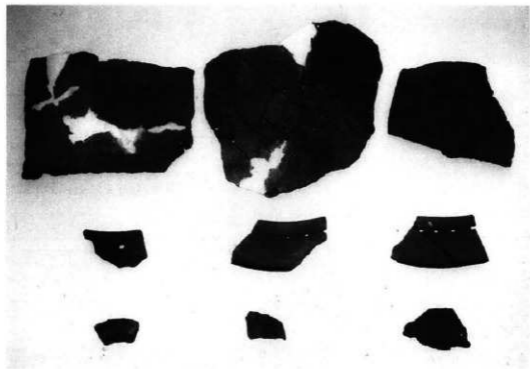
写図7 矢崎地籍土壌1



1. 上 面



2. 石の面と落ちこみ



1. 雙形土器、深鉢形土器



2. 朱彩土器



1. 口 縁



2. 羽状縄文

写图 10 矢崎地籍 1 号住居址出土土器(3)



付編 矢崎・北浦遺跡出土鉄滓の 金属学的分析調査結果報告

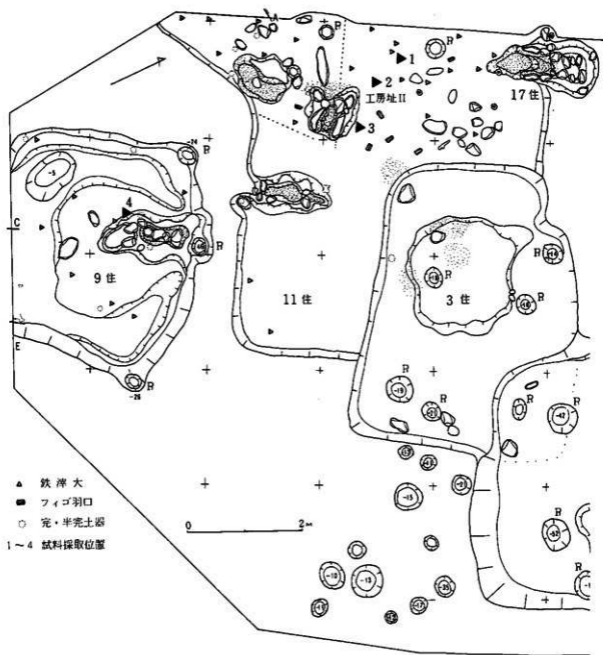
島根大学客員研究員 葉賀七三男

1. はじめに

上郷町別府矢崎遺跡の発掘調査にあたり、意外にも鉄滓・羽口等の金属関係の遺物が検出されたとの地元岡田正彦先生からの連絡によって、早速大沢和夫先生の同道をお願いして現地調査を実施した。考古学的発掘調査結果については、今村善興発掘調査団長をはじめ関係各位の御尽力によって既に公刊されている。しかしながら、遺構および検出された遺物については、特に金属史の見地から誠に貴重な資料であるが、長野県下においては、埴科郡坂城町教育委員会発行の『開成製鉄遺跡調査報告書』（第1次昭和53年2月1日・第2次昭和54年5月1日）以外は、金属技術史研究の基本に即した考古学的調査の実施がほとんど皆無であって、全国の研究水準から見ても、空白地域として取り残されているのが現状である。したがって、今後金属技術史面よりの研究を促進展開するため、出土遺物の中、特に製鉄関係の研究者間で梶形滓と分類される鉄滓につき、重点を置いた分析調査を実施することとした。

梶形滓は、近世のたたら製鉄により生産された鋳（けら）、銑鉄から錬鉄を精製する工程、いわゆる大鍛冶（おおかじ）の際排出されるものとされているが、鍛冶の火床（ほど）炉底に生成されるか否かについて未確認のものである。また、矢崎遺跡の立地条件が古代における東山道往路とも関連し、極めて貴重な位置を占める点とも併せ、鍛冶遺構の重複状況・多数の伴出須恵器の存在等からも、特別に分析調査の実施を要望した。時代は下るが、近接の中世の北浦遺跡から検出し、上郷町歴史民俗資料館に展示中の梶形滓も、比較のため資料に加えて調査を実施した。矢崎遺跡の試料採集位置は挿図1のとおりである。

金属的・鉱物学的分析調査の結果は、東北大学選鉄選錬研究所岡田広吉助教授の御高配・御協力と同所分析スタッフの御尽力によって得られたものである。



挿図1 分析試料採取位置図

2. 分析調査結果

① 分析試料

試料番号	出土地点	形状	大きさ
1	矢崎遺跡 工房Ⅱ北側	碗形	中
2	” ”	”	”
3	” 工房Ⅱ東側	”	大
4	” 9号住居址カマド付近	スラグ	小
5	北浦遺跡	碗形	大

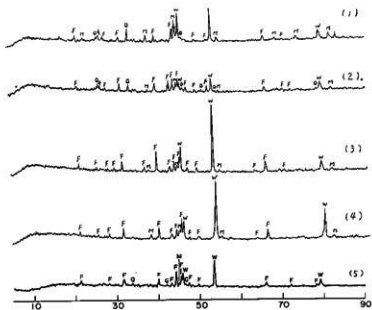
② 分析試料の物理性

試料番号	重量(g)	見掛け気孔率(%)	吸水率(%)	見掛け比重	カナ比重
1	213	21.05	7.51	3.55	2.80
2	84	25.16	9.42	3.57	2.67
3	437	14.71	5.72	3.01	2.57
4	73	6.01	1.51	4.24	3.99
5	441	20.08	6.76	3.72	2.97

③ X線・蛍光X線分析結果

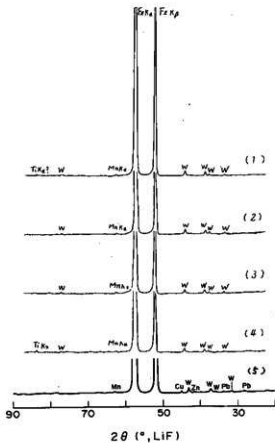
試料		1	2	3	4	5
X線分析	ウスタイト W FeO	○	・	◎	◎	○
	磁鉄鉱 M Fe ₃ O ₄	○	・	・	・	・
	ファイヤライト F Fe ₂ SiO ₄	・	・	○	○	○
	石英 Q SiO ₂	・	・			・
	針鉄鉱 G Fe ₃ O ₄ ・H ₂ O	・	・			・
	金属鉄 m mFe		・	・		
蛍光X線分析	元素組成					
	鉄 Fe	◎	◎	◎	◎	◎
	チタン Ti	?				
	マンガン Mn	?	・	・	・	?
	銅(亜鉛・鉄) Cu (Zn・Pb)					?

(注) ◎多量 ○普通 ・少量 ・微量 ?疑問(ごく微量)



2θ (°, FeKα)

W: クスタイト F: ファイヤライト M: マグネタイト G: ジュオタイト Q: 石英



2θ (°, LiF)

挿図2 X線分析結果(上)と蛍光X線分析結果(下)

④ 遺構土質の特徴

試料1～3は椀形滓で外形が丸い鍋底形を呈し、試料4は普通の鉄滓で、前者は空隙（穴）が多く、後者はそれが少ない。したがって、試料の物理性において、気孔率・吸水率・比重の各項目に特徴が明らかである。しかしながら、岡田広吉先生から鉄滓そのものより、付着する泥土の土質について、灰黒色土に多くの雲母を含む点に留意すべきであると指摘された。

矢崎遺跡の土質は松川两岸の低位段丘南条面および別府面の特徴を示すものと考えられるが、全国的な遺構の土質構成からは、特異な部類に属する可能性もあり、今後検討すべき課題である。

3. 実態写真調査結果

外形および切断面について図版1～7に示す。椀形を呈する試料1～3および5は極めて多孔質ではあるが、全体として均質であり、層状あるいは逐次堆積したものでない事実が確認された。試料4は2個の大きな孔が外側に認められるものの、試料1～3および5に比較して多孔質でなく、前提2②の物理性に掲げるとく、比重が4前後となり大きい調査結果と合致している。

4. 反射顕微鏡調査結果

反射顕微鏡による調査結果を図版8～12に示す。試料1～3および5については、それぞれ一般組織・空隙部（孔の部分）・微細組織について、検鏡の上写真撮影を実施したが、いずれも白玉状のウスタイト、灰色のファイヤライト、雪の結晶の一部を想像させる白点状のマグネタイトが確認された。しかし、微細組織においては白点状の金属鉄が認められ、鉄滓中に微量に存在する状況が把握された。多孔質の孔の部分では、椀形滓である試料1～3および5は、いずれも孔および溝状の空隙部分表面に、経年変化による錆化現象である針鉄鉱の生成を確認することができた。

平安時代の試料1～3と中世に属する試料5との相違は、写真倍率の差を考慮に入れて検討すると、平安時代と中世の時代差だけ針鉄鉱の生成量（厚みともに）の多少が明らかに認めることができた。針鉄鉱の生成については、鉄滓の置かれていた条件、湿地で水分の多い土層とか気候の変化を受けやすい地層の深さとかに関連があるものと推測されるが、矢崎・北浦両遺跡の立地条件がほぼ同じと考える場合、写真11～13に示される針鉄鉱の生成状況と写真14のそれとは、前者が2重3重に錆化している事実が明らかで、数100年の経年変化量としても妥当なものであろう。鉄滓の空隙部の反射顕微鏡調査のみで、時代の新旧をある程度予測できるものと判断される。時代の下った江戸時代の鉄滓の経年変化をも検討する必要があるのはいうまでもないが、これまでの経験ではあまり針鉄鉱の生成は認められていない。

図版1 試料1 外形



表



裏



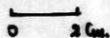
側



表



裏



側

図版 3 試料 3 外形



表



裏



側

圖版 4 試料 5 外形



表



裏



側

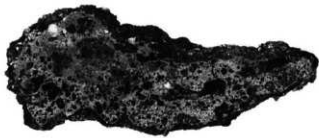
図版5 試料4 外形と切断面



外形



切断面



試料1



試料2

図版 7 試料 3・5 切断面

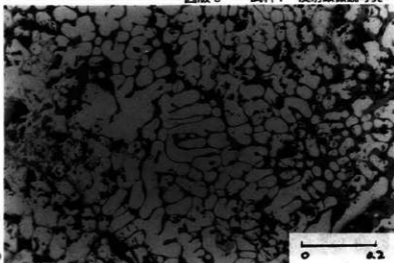


試料 3

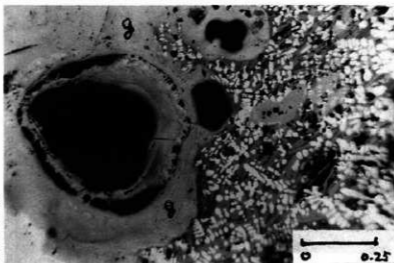


試料 5

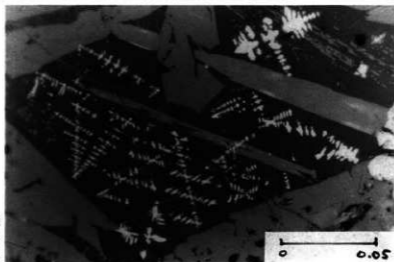
一般組織
ウスタイト (白玉)
ファイヤライト (下の灰色)



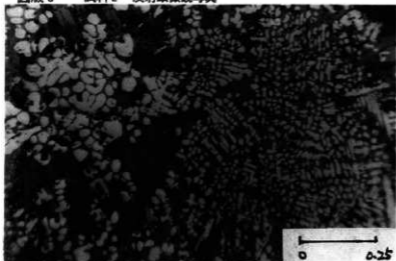
空隙部
針鉄鉱
ウスタイト (白玉)
ファイヤライト (灰色)



微細組織
マグネタイト (白色)
ファイヤライト (灰色)

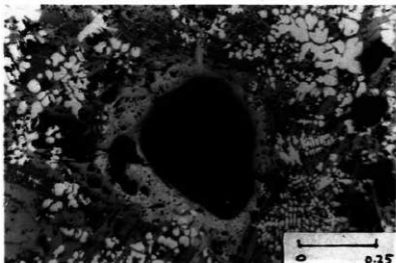


図版9 試料2 反射顕微鏡写真



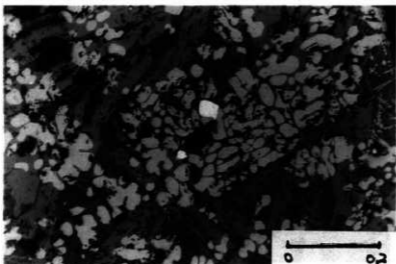
一般組織

ウスタイト (白玉)
ファイヤライト (灰色)



空隙部

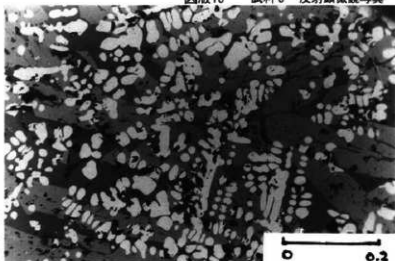
針鉄鉱
ウスタイト (白玉)
ファイヤライト (灰色)



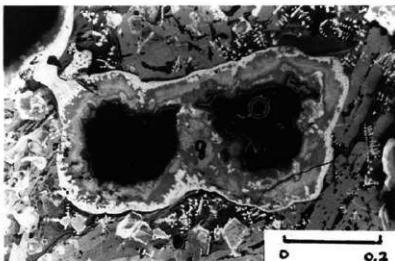
微細組織

金属鉄 (中央白色)
ウスタイト (白玉)
ファイヤライト (灰色)
マグネタイト (右)

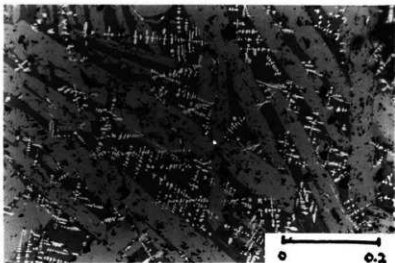
一般組織
ウスタイト (白玉)
ファイヤライト (灰色)



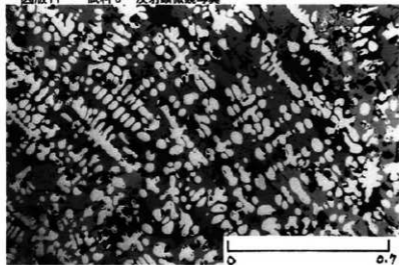
空隙部
針鉄鉱
ファイヤライト (灰色)
マグネタイト (小白点)



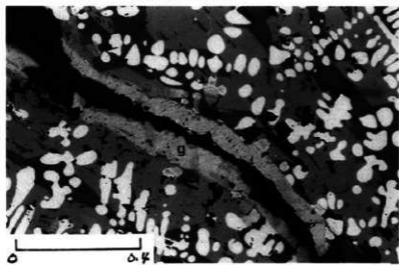
微細組織
金属鉄 (中央白点)
ファイヤライト (灰色)
マグネタイト (小白点)



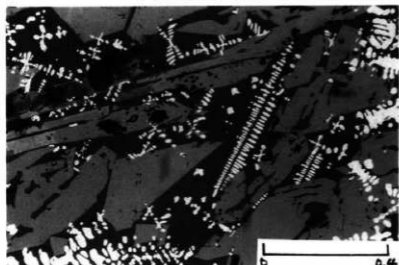
図版11 試料5 反射顕微鏡写真



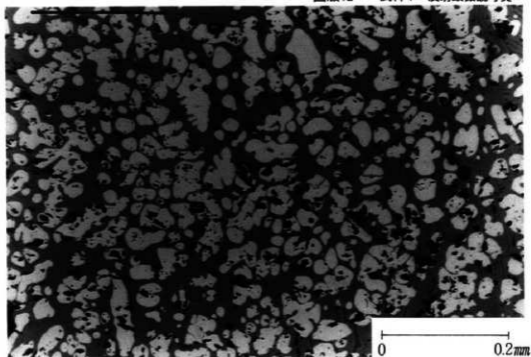
一般組織
ウスタイト (白玉)
ファイヤライト (灰色)



空隙部
針鉄鉱
ウスタイト (白玉)
ファイヤライト (灰色)



微細組織
ファイヤライト (灰色)
マグネタイト (白色)



ウスタイト (白玉) ファイヤライト (灰色)

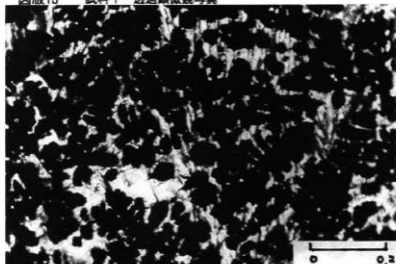
5. 透過顕微鏡写真調査結果

透過顕微鏡による試料1～4の調査結果を図版13～16に示す。透過顕微鏡による検鏡方式に平行ニコル（オープン）・直交ニコル（クロス）があるが、本調査はいずれも平行ニコル方式によって調査された結果である。反射顕微鏡の結果とは逆に、ウスタイト・マグネタイトは黒く撮影されてはいるが、針鉄鉱およびファイヤライトは反射の場合とほぼ同じ色をしている。

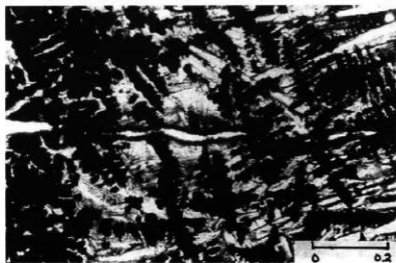
図版15の試料3は特別にファイヤライトが短冊状に結晶化した部分を示しており、一般に鉄滓の中のガラス化した部分は、非結晶のため視野に素通しの空間として撮影されている場合が多い。しかし、そのガラス質に微細な鉱物質のもの、例えばウスタイト・マグネタイト等の微粒が含まれている場合には、平行と同時に直交で撮影すると、その組成鉱物が判別できるものと考えられる。

以上の見地からは、金属学的分析調査の上に、透過顕微鏡による鉱物学的分析調査を実施すればなお詳細に鉄滓の生成排出状況の把握が可能になると考えられる。原料の鉄鉱石等は天然鉱物であるが、その精錬の結果生成される滓は人工鉱物であり、鉱物組成には相違ないはずであるので、透過顕微鏡によって今後どしどし分析調査が実施されるべからう。

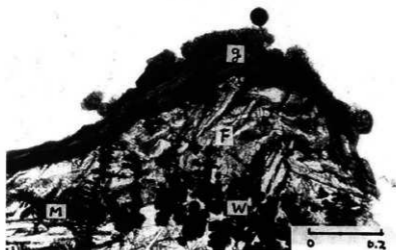
図版13 試料1 透過顕微鏡写真



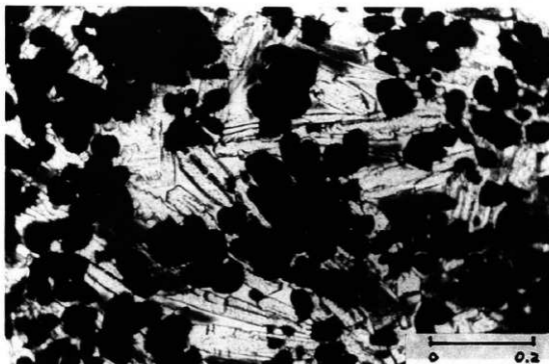
一般組織
ウスタイト (黒色)
ファイヤライト (白色)



一般組織
マグネタイト (黒色)
ファイヤライト (白色)
針鉄鉱 (中央白帯)



空隙部
ウスタイト (W)
マグネタイト (M)
ファイヤライト (F)
針鉄鉱 (G)

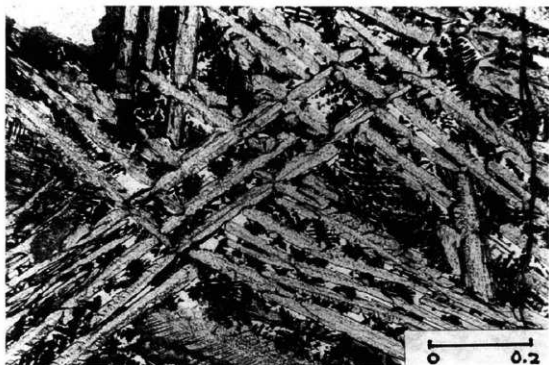


一般組織 ウスタイト (黒色) ファイヤライト (白色)

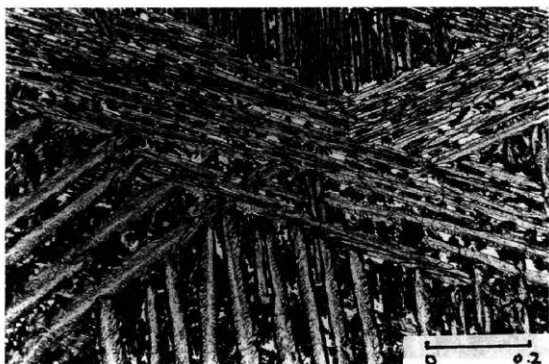


空隙部 空隙 (P) 針鉄鉱 (S)

図版15 試料3 透過顕微鏡写真



一般組織 針鉄鉱 (左上) ファイヤライト (短冊状)



一般組織 ファイヤライトの間にウスタイト・マグネタイトがわずかに生成



一般組織 ウスタイト (黒色) ファイヤライト (白色)

6. む す び

以上の調査により次のとおりの結論が導かれる。

- (1) 鉄滓の発生の源である原料としては、鉄鉱石に由来するものであり、砂鉄を原料としていない。組成元素としては微量のチタン・マンガン・銅・鉛・亜鉛等を含むが、これは鉄鉱石を原料とした証拠である。
- (2) 碗形滓はウスタイト・ファイヤライトが多く、マグネタイトは少量であるが、かなり針鉄鉱が空隙面に生成しており、経年変化が進んでいることを証している。切断面はかなり多孔質で、普通の鉄滓と比較して極めて空隙が多く、それだけ比重が小さくなっている。しかし、全体は均質であり、長時間にわたって逐次堆積もしくは沈積したものでないと判断される。
- (3) 碗形滓は大鍛冶滓とされているが、必ずしもすべてが大鍛冶工程から生成されたとは考えがたい。矢崎遺跡全体の状況から検討しても、工房址としての火床（ほど）構造と、かなり重複使用された工房址であるとともに、付近の黄色粘土の堆積、焼土の存在等もあり、原料鉄鉱石の精錬から鉄製品の加工まで一貫した工房址であった可能性も全く否定することはできない。今後、碗形滓およびその出土状況についての知見を数多く蓄積するのを必要とする。
- (4) 矢崎遺跡の立地条件が、松川下流の渡河点として好適の位置であり、飯田周辺の低位段丘別府面が飯田市座光寺に所在する伊那郡衙への主要道路敷と見なされる点を併せて考慮すれば、古代東山道の経路として有力な候補地であり、若し鉄鉱石・木炭等の原材料を検討すれば、極めて好条件の適地となったであろう。
- (5) 矢崎遺跡一帯の土質は、松川沿岸の低位段丘南条面・別府面の特徴として極めて雲母分が多いが、この点についても今後留意して調査する必要がある。
- (6) 鉄滓に金属鉄も微量ながら認められたので、今後は化学分析調査も実施しておく必要性がある。

最後に、矢崎遺跡現地調査に際して御連絡・御尽力を賜った大沢和夫・岡田正彦両先生、発掘調査団長今村善興先生、上郷町教育委員会吉川昭文教育長・吉川勝一局長補佐・山下誠一氏はじめ関係各位ならびに、開成遺跡調査報告書入手について御高配賜った長野県考古学会森嶋稔会長に深甚なる謝意を表するものである。

【参考文献】

- 今村善興 1988 「昭和62年度上郷町発掘調査の概要」『伊那』No.719
岡田正彦 1988 「長野県下の製鉄遺跡の様相」『伊那』No.719
坂城町教育委員会 1977 『開成製鉄遺跡調査報告書』
坂城町教育委員会 1978 『開成製鉄遺跡第2次調査報告書』
下伊那地質誌編集委員会 1976 『下伊那の地質解説』

後 記

当町の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）の数は昭和58年3月31日現在で69箇所に及びます。しかも当時の分布調査は遺物の表採や地形、伝承等の条件を考慮した上で範囲の線引きがなされているが、当然のことながら現況水田地から遺物を表採することは不可能だったから、永久的構築物をつくる場合等は特に注意する必要があります。したがって分布地図の範囲外であっても状況に応じて極力目を通すことにしています。

地下にある埋蔵文化財は保存されることが望ましいとされているが、又一方人々の生活の動脈とも言うべき道路等の新設拡幅改良も必要であり、このような場合は一般的には記録保存することで調整を計るしかないと考えられます。このような観点から町が行う開発行為については計画を事情聴取し、状況に応じて規模の大小にかかわらず発掘調査を行うこととして取り扱っています。当町の場合遺跡の分布状態が広範囲に、しかも満遍なく存在するから、至るところで遺跡に係ることになり、例えそれが極く小規模なものであっても考古学的に重要な位置の場合は、ほとんど調査して地下の状況を確認し、必要に応じて発掘調査することにしています。

今回の報告書はいずれも昭和61年度に小規模ながら発掘調査を実施した記録であるが、やはり大切な資料を提供しており、当町の考古学の上で大変貴重なものと確信します。

規模の大小はあれ数多くの発掘調査を実施しなければならない情勢にあって、調査体制が充分につくり得なかったので、報告書発行が平成元年度に至りました。

相次ぐ過密な発掘日程の中で、調査団長にお願した今村善興先生の実に献身的な尽力はもとより、調査補助員、発掘作業と整理作業に従事いただいた皆さんの努力に深甚の感謝と御礼を申し上げます。

平成元年5月1日

上郷町教育委員会

上郷町埋蔵文化財発掘調査報告書第20集

中 島 遺 跡
矢 崎 遺 跡

— 昭和61年度町道御殿山14号線・別府線改良工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成元年5月12日 発行

編集・発行 / 長野県下伊那郡上郷町教育委員会
長野県下伊那郡上郷町飯沼3092

印 刷 / 株式会社 秀 文 社
長野県飯田市通り町1-2
